
血族『Last stage』

橘F鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血族『Last stage』

【Nコード】

N6298F

【作者名】

橘F鈴

【あらすじ】

“血族”第三弾。裕福な家庭で才色兼備と言われて育ったブラッドは“直感能力”という第六感に長けた特種能力を持っていた。彼は父カドマスが遺した手紙に記された警告をその能力によって開封前から察するが、警告された少年レッドに遭遇してしまう。彼は全く同じ姿形で“三感同時始動能力”（見る・判断する・動く）を同時にできる特種能力を持っており、それには隠れた理由があった。双子の彼らを表と裏の世界に分けた人物がいたのだ。やがてカドマス殺害の真相も浮かび上がる。憎悪、殺意、復讐が渦巻くこの歪な

争いは呪われた血族の証なのか？——そして最後に残るのは……？

Scene 1・『遭遇』

自分と同じ姿形をしていながら全く別の世界を生きてきた少年ブラッドの後ろ姿を、レッドは蓄積したどす黒い憎悪を燃やして見送った。しかし、その胸中とは裏腹に、彼の顔には微笑が浮かんでいた。

逃げられると思うなよブラッド。

同じ姿形の人間は二人も必要ない。

必ずお前を消してやる。

本当のパパとママの愛を独占したお前を決して僕は許さない。

汚れることなく平穩に暮らしてきたお前の幸せを、一瞬にして壊してやるからな……

レッドは石畳の上を歩き出した。

愉快で仕方がなかった。

こんなに簡単に終わってしまうなんて、きっと神様は僕に味方してくれたんだ。

あいつが幸せを全部一人占めしたから、神様が僕にチャンスくれたに違いない。

あいつに罰を与えてくれたんだ。

——でも、楽には死なせないよ。

通行人を装うレッドの歩調が早まり、しだいに駆け足になる。人を避けながら急ぎ足で通りを進んで行くブラッドの後ろ姿を彼はその超人的な動体視力で確実に捕らえながら、肩に掛けたバッグで隠すように上着の中に手を差し込んだ。

50メートル……40……35……20……

徐々に接近し、目でその距離を測っていく。

彼が装填を済ませたワルサーPPKの銃口がブラッドに向けられた。彼の同時三感（見る、判断する、動く）起動能力が始動する。

デジタルカメラのフォーカス機能よりも正確に、彼の三感が的を捉えた。

まずは……

発砲した。減音機で絞られた銃声とともに、弧を描いた銃弾がブラッドの背後に襲いかかる。その滑らかな曲線が標的のブラッドに到達するまでに、彼の足元に角度を下げる。

「！？」

それは計算済みのことであり、確実に的を捕らえていた。だが銃撃を放ったレッドの顔には苦悶と驚愕の色が滲んだ。

彼の視線は標的のブラッドではなく、別の所に向いていた。銃弾が直撃したのは彼が狙ったブラッドの足——ではなく、瞬時に突き出された鞆だった。同時に彼を庇うように長身の男性が前に出て、振り向きざまに狙撃者を見据えた。男性が反対の手で交差するように握り締めた銃が光る。

ステンレス

——銀色の銃身——S&W60<スミス・アンド・ウェッソン>

レッドは銃を上着の中のホルスターに忍ばせた。その眼差しを数メートル先で銃を構える長身の男性に向ける。

忘れもしない。あの華麗な身のこなし、長身、金髪、そしてあのリボルバー。

レッドは声に出さずに独語した。

ウイングス

Wings——そんな所に居たのか……

Scene 2・『守護天使』

レッド目掛けて一発の銃撃が放たれた。

「……」

レッドの目にはその軌道が見えた。しかし秒速200kmを超えるそれを彼は避けることなどできなかった。

いや、彼の能力をもってすれば相手が銃を向けた瞬間を見て動くことも可能かもしれない。だが相手は特殊能力を持たない人間でありながら、その俊敏で華麗な動作は手品師^{マジシャン}のように鮮やかだったのだ。そのためレッドが捕らえたのはすでに発砲した後となった。見えてしまうことが余計に恐怖を誘う——はずだったが、彼は怯えることなくそれを受ける。

「キヤア……!?!」

通行人の女性が悲鳴をあげた。銃弾が彼女の横を通過したのだ。

周囲にいた人々がその悲鳴に驚愕し、辺りは騒然となる。やがてその事態に気付いた人々が彼らから離れるように散らばっていく。後から、最初に叫んだ女性も慌てて転びそうになりながら逃げた。

「ふふ……」

レッドは目を細めずに笑った。慄然と歓喜を揺さぶる興奮が込み上げる。彼の左側面に掛かった髪は切断され、小さな束が石畳の上に向かつてはらはらと舞い落ちる。そしてその髪が落ちた左頬から朱の横線が滲み出し、うつすらと細い筋状になって垂れ落ちた。その間、銃激を放った男性は素早く乗り付けていた車にブラッドを引き連れて押し込み、急発進させて逃走した。

現場に残されたレッドは一人佇む。

——相変わらずの腕前だね、ウィングス。君の遺伝子と僕の遺伝

子を合わせたら最強の狙撃者^{スナイパー}が誕生するだろうな。

やっぱり君が欲しいよ。いや、欲しがっているのは僕よりも

“パパ”かな——？

「ふふ……」

レッドは街灯の下に落ちた塊を拾いあげると、指で摘んだそれを見て微笑した。

38special——その鉛の塊を街灯柱に出来た僅かな窪みに当てる。するとそれは、ぴたりとそこに嵌まった。

——この動く人間が散らばった街道で、瞬時の判断で発砲した銃の弾道を人の間隙を通し、狙撃者には掠り傷だけを負わせて牽制し、さらにはその流れ弾をこの細い棒に当てるとは。

「ふふ……見事だ」

レッドは渴望に血をたぎらせた。

ウイングス、やっぱり君は最高だ。僕が求めているものを全て持っている。

その才能も美貌も延々と眺めていたい。

だが、僕は最低な気分になったよ。

そんな君までもが、あの“ブラッド”に横取りされてしまうとは

……

レッドの口角が片方だけ上がった。その茶色い瞳に憎悪の念が浮かび上がる。

——いいだろう。それなら二人まとめて始末してやる。

レッドは踵を返し、雑踏に紛れて町のどこかへと消えた。

Scene 3・『隠れた意図』

ブラッドを乗せて逃亡した車は走行を続けていた。ハンドルを握る男性のグレーの瞳は鋭く研ぎ澄まされ、神経が前後左右に張り巡らされていた。その横顔を見ていたブラッドがその沈黙を破る。

「フランスス……」

それは霞んで消え入りそうな声だった。男性は緊張を解かず前方を向いたまま、短く「はい」と返事した。

「助けてくれてありがとう」

ブラッドはささやかな微笑を添えてそう呟いた。狙撃されたという驚愕の余韻はまだ残っていたが、隣にいる男性の存在がそれを緩和させてくれていた。

「いいえ、私はあなたのボディガードの護衛を兼ねた執事ですので」

男性は恭しくそう返した。それは分かりきった答えではあったが、ブラッドには嬉しかった。少し照れながら苦笑を漏らす。

「そうだったね……」

また沈黙が戻った。フランススと呼ばれた男性は鮮やかなハンドル捌きで車線変更する。それから車は大通りに入って加速した。

やがてその沈黙は途絶えた。序曲のように違和感なくブラッドが語り始める。

「リチャード伯父さんに新しい執事を紹介するって言われた時は不審に思ってたけど、お前がああ屋敷に来てくれて良かったよ」

思い返すブラッドは軽く目を細めた。心の中では、さまざまな意味の笑いを繰り広げていた。それは皮肉と悦びと疑念、それぞれが孤立した意味の笑いだった。

フランススがブラッドの屋敷に来たのは数年前に遡る。ある日の晩、ブラッドの伯父リチャードが何の前触れもなく彼を連れてきたのだ。

「ブラッド、今日はお前にもプレゼントを持ってきた」

ブラッドの母ロビネッタに会うことを口実に屋敷を訪れたリチャードは、彼女への手土産と形だけの挨拶を済ませた後、どこか怪しげで大げさな笑顔でそう言った。

「あのぶつきらばうな執事をお前が解雇してしまったからなあ、何かと不便だと思って連れてきた」

彼が手を叩くと扉が開き、その奥から一人の男性が姿を現した。リチャードがその男性の背中に手を当てて招きよせる。

「この屋敷の新しい執事だ」

「!？」

ブラッドは驚愕した。紹介してきたのが伯父のリチャードだったからだろう。リチャードはブラッドの“直感能力”に魅せられ、甥のことを便利な道具か何かと勘違いしている。ブラッドがその直感能力で犯人を言い当てたりする度に、賭博で大儲けしたギャンブラーのように笑うのだ。刑事としてのプライドはどこへやら、彼は自分の名声を甥の力で密かに勝ち取るうとする人間となっていた。ブラッドにはそれが痛ましかった。そして特殊な能力を授かってしまった自分の運命を呪った。自分を見詰めるリチャードやもう一人の伯父がそうさせたのだ。彼らのあの邪な視線が眼に、脳裏に焼きついて離れない。——野心の塊そのものと言っていい狂喜した眼が。

その伯父が紹介する人物だ。何か裏があるのでは？ と不信感を抱いてしまうブラッドだったが

「彼はフランス・ロイド。事情があつて大学は出ていないが、知性、才能ともに長けている。特技のピアノはプロに匹敵するほどの腕前だ。そして——射撃の名手でもある」

随分と揃い踏みだな、と冷めた目をしながらブラッドはそれを聞いていた。この伯父はきつと都合の良いことしか述べていないのだ。こんなにも好条件が重なるわけがない。ブラッドの不信感は深まったが……

「お世話になります。ブラッド様」

名を名乗る簡単な自己紹介をした後、男性――フランシスはそう言って手を差し伸べた。その手はピアノ奏者に相応しく長い指は繊細に映り、所作も泰然としていて無駄な動きがなく美しかった。そこに主人を敬う慇懃だが柔らかな眼差しが存在していた。上質でありながら嫌味のないささやかな微笑が可憐に光る。

伯父が運んできたこの“贈り物”は魔性だった。爪先から頭の天辺まで何の欠点も見当たらない。均整の取れた見事な長身。金糸のように艶めくしなやかな髪。端正な顔立ちに並ぶ涼しげなグレーの瞳。それはまるで息を飲むほどの美貌だった。美しいものを好むブラッドは、魔法にかけられたように彼を拒絶する言葉など出なくなる。

「気に入ったようだな」

伯父はしたり顔でそう言うと、その贈り物を残して部屋から出て行った。

そんな出会いから今に至る。そして例の怪しい伯父リチャードだが、彼の言動はやはり不審だった。執事を任されたフランシスに、ブラッドの送迎や過度ともいえる護衛までも義務付けたのである。父の不幸を理由に、身の厳重な注意を促す伯父の説得に折れたブラッドは、仕方なくそれに従うことにした。先程はその業務の一環である送迎に、フランシスが向かう途中に遭遇した出来事だったのだ。

「だけどさつきは驚いたよ。何で僕があのように通りで寄り道してるって分かったの？」

ブラッドは少し面白がるように笑みを浮かべ、隣の執事に伺うような眼差しを向けた。

フランシスは運転に神経を働かせながら、動じることなく答える。

「勘です」

「勘……？」

その答えにブラッドは小首を傾げた。そして俄かに眉を潜める。人からそんなことを言われると何だかおかしかった。ブラッドは自

分の持つ“直感能力”も他人からすればこんな風に疑わしいことな
んだろうなあと自嘲した。そして表情を真顔に戻し、言葉を紡いだ。
「さっきの少年のことだけだ」

そこで含ませるように間を置いてから彼は続けた。

「彼は……出会ってはいけない人間だったんだ」

「……」

フランスは前方を向いたまま、そこでは何も問いかけなかった。
ブラッドも前方を向いたままドアの手摺に肘を寄せ、景色に目をや
りながら言葉を継いだ。

「お前の事を信頼して話すけど……彼は、あの少年は僕にとって“
特殊”な存在らしい」

何か遠まわしな言い方をする主人に、やっとここでフランスが
疑問を投げかけた。

「と言いますと？」

ブラッドは笑みとも困惑ともとれない、名状しがたい複雑な表情
をしてそれに答える。

「彼は僕と同一形体の人間らしい」

「双子ではないのですか？」

フランスは抑揚のない声でさらに問う。

「よく分からないけど、全く同じ形の者同士みたいなんだ」

それが意味するのは二人が、またはどちらかが人工的に作られた
存在——クローンだということなのか、それとも……

「何故そのようにお思いになるのですか？」

フランスはあくまでも冷静にそう聞き返す。彼は主人が妄想め
いた話をして、決してそれを軽く受け流すような人間ではなかつ
た。

「父の遺言なんだ」

ブラッドは微笑してそう答えた。フランスは「そうでしたか」
と静かに頷き納得する。

「フランス」

「はい」

「僕はその少年にとって目障りな存在のようだ」

「……」

「僕は彼に命を狙われている」

ブラッドは落ち着いた声音でそれが確かなことのように告げた。

だが、起こるべくして起きた事実とこの後待ち構えている災難に怯懦しているのが、彼の茶色い瞳に表れていた。フランスは彼が醸し出す空気の違いから、その胸中を察した。

「ブラッド様」

その声が羽毛の柔らかな心地良さでブラッドの心を包み込む。

「私があなたをお守り致します。この命に代えても」

その一言は穏やかなその声音とは裏腹に、強い意志が込められていた。

Scene 4・『失墜の夜想曲』

屋敷に戻るとブラッドは自室の机に着き、椅子の背に凭れて頭を後ろにもたげた。間もなくしてそこにノックが響く。

「お茶をお持ち致しました」

フランススの声だった。ブラッドが入るように促すと、お茶のポットや食器を乗せたワゴンを転がしてフランススが入室した。

「お前は本当に気がきくな」

ブラッドは頭を後ろにもたげたままの状態で、目玉だけを動かして呟いた。フランススが適当な所にワゴンを止めて支度に取り掛かろうとすると、ブラッドが腰掛けた椅子が軋む音を立てた。咄嗟にフランススがその背後に手をかざす。こうしてひっくり返りそうになったことが何度かあったのだ。ブラッドは呑気に天井を仰ぎ見ている。

「あまり反り返ると、落ちますよ」

フランススはあくまでも穏やかに嗜めるが、ブラッドは無邪気に笑い

「落ちそうになったら、お前が助けてくれるだろ？」

と伸びをした――その途端

「わぁ……っ!？」

目の前の景色が大きく揺らぎ、ブラッドは後に迫る衝撃に目を見張った。

「……？」

が、その衝撃は訪れなかった。しかし椅子ごと後ろに倒れた状態になっていた彼は、そこから立ち上がり後ろに回り込んだ。

「……フランスス! やっぱりお前は守ってくれたね？」

感嘆の声を上げ、ブラッドは後ろで支えてくれた執事に飛び付いた。執事のフランススはやれやれと困ったように微笑しながら椅子を起こす。

「気を付けてください」

苦々しげではなく穏やかに諭すその声にブラッドは

「はい」と素直な返事を返し、椅子に座り直した。

フランススはティーポットにスプーンを使ってハーブを入れ、沸騰した湯を注いだ。蓋をして数分蒸らしてからそれを水平に回し、静かにティーカップに注ぐ。その中に蜂蜜を垂らしてかき混ぜ、ソーサーに乗せたものを主人の机に運んだ。

「良い薰りだ……」

湯気が立ち上るカップを手に持ち、ブラッドはその馥郁に酔い痴れた。

「今日は何のお茶？」

「レモンバームとミントをブレンドした物でございます」

「そうなんだあ……」

ブラッドはすっかり寛ぎ、その風味を味わう優雅な一時が流れ、そこに安息が生まれた。

「フランスス」

「何でしょうか？」

ふと主人に呼ばれ、フランススは片付ける手を止めて彼の方を向いた。

「ピアノを弾いてくれないか？」

「……」

唐突なその言葉にフランススは表情を失った。それは戸惑いとも、驚きとも違うものだった。

「まだ、聴かせてもらったことがなかっただろ。急に聴いてみたくなったんだ。寝る前にちよつとだけなら、いいだろ？」

主人の謙虚な頼みに、僅かに間を空けてからフランススは承諾した。

「そうでしたね。分かりました」

「本当？　じゃあ広間で待ってるから」

ブラッドは感嘆の声を上げ、表情を輝かせながら部屋を出て行っ

た。

広間にはグランドピアノが置かれていた。誰も弾かなくなったそれを覆う白いレースのカバーは、だいぶ色がくすんでいる。を外し蓋を開くと、ブラッドの胸に懐かしさが込み上げてきた。

「うわああ、懐かしいなあ……」

感嘆の声を漏らし、鍵盤を愛しげに指で触れる。ドの音が鳴った。次々に他の鍵盤も押してみる。重たい反動が指に返ってきた。この感覚に覚えがある。短く突き抜けるような音色も当時耳にした音を髣髴とさせ、未だ色褪せておらず彼を誘惑した。

「……」

ブラッドは椅子に腰を下ろし、いつしか演奏を始めていた。子犬のワルツ——それを弾いていた。強弱を付けて鍵盤を叩き、その旋律に乗って体を揺らす。心地よかった。練習は嫌だったが、この曲を弾いているとなんだか楽しくなる。その瞳に満足げな笑みが浮かぶ。しかし途中で人が来る気配を感じ取ると、彼は気持ちの良い流れに乗って演奏を短縮し、子犬が跳ねるように軽快に和音を叩いて締めくくった。そして首を巡らせると、フランススが歩み寄って来るのが見えた。

「ブラッド様もお弾きになるのですね。お上手でした」

「恥ずかしいなあ、下手なのに……」

賛辞の言葉を述べられたブラッドは複雑な苦笑を浮かべ、椅子から立ち上がった。

「次はフランススが弾いて」

彼は掌を差し出して、椅子に座るようにと執事に促す。執事は目を丸くした。

「もう、演奏なさらなくてもよろしいのですか？」

「いいよ、僕の下手な演奏をあまり聴かれたくないし、それより早くお前の演奏が聴きたい」

「わかりました」

フランスは主人の座っていた椅子に腰掛けた。

ブラッドは席から離れ、そばにあつた安楽椅子に腰を下ろす。肘掛に頬杖を突き、そこから興味深げに様子を窺った。彼の熱い視線がフランスに注がれる。才色兼備ともてはやされてきたブラッドだったが、それ以上のものを兼ね備えているこの執事に対して、彼は嫉妬ではなく期待を高めていた。

フランスの長い指が鍵盤の上に置かれ、垂直に伸びた背筋と引いた顎が、演奏に入る瞬間の緊張感を醸し出す。その指が羽ばたくように鍵盤を離れ、ふわりと優雅に着地した。

静かな演奏が始まる。鍵盤の上を繊細さと重みの調和した旋律を奏で、長い指が生き物のように動く。ブラッドもどこかで耳にしたことがある曲だった。長く華麗に見えた指は、鍵盤を叩くと男性的な力強さも同時に醸し出していた。執事の奏でる美しい音色にブラッドは陶酔し始め、いつしか瞼を閉じていた。母の演奏するピアノの音色とは別質のものだった。まるでピアノという鍵盤楽器を通じて、演奏者の心の中に入っていくような不思議な感覚が生じる。執事——フランスの心の声が旋律に乗せて聞こえてくるようだ……

ふいにフランスの指が鍵盤から離れた。彼は演奏を止め、椅子から立ち上がる。

「どうしたの？」

ブラッドが問いかけ、不思議に思いながらその様子を見てみると「ファの音が鳴らないので」

フランスは前方に回り込んで蓋の中を覗いた。

「ああ、やはり弦が切れていたか……」

残念そうにそう呟く。

「いいよ気にしなくて。一つぐらい音が抜けてても僕には全然気にならないし」

「……」

主人の気遣う言葉にフランススは表情を失くし、沈黙した。それから席に戻る。

着席した途端、彼の眼差しが鋭く光った。そして再び魂が吹き込まれたかのように、彼の指が優雅な舞踏を始めた。

彼は同じ曲を今度は変調して弾きだした。ブラッドはその演奏に驚嘆し、目を見開く。その巧みな奏法に彼の意識はぐいぐいと引き込まれていった。

「すごいね！ 咄嗟にそんなことができるなんて」

しかしフランススは愕然として悪態をつき――

「だめだ……！」

無造作に叩いた鍵盤が不協和音を奏でる。

「フランスス？……」

見たこともない彼の荒れた言動に、ブラッドは啞然とした。

「こんなものはフォーレの“夜想曲第1番変ホ短調”なんかじゃない！」

それから彼は、また別の曲を弾きだ始めた。が、どことなく納得がいかない表情をしていた。

「次は何の曲？」

連弾のように音の幅が広い演奏を見てブラッドは呆気にとられる。

「ドビュッシーの“夢想”を即興でアレンジしたものです」

「そうなんだ……」

普段とは別人のように神経質になり、殺伐としているフランススに圧倒され、ブラッドの口数は減っていた。

間もなくしてフランススが演奏をやめ、蓋を閉めた。

「やめちゃうの？」

「直してからにしましょう。これではお聞かせできるような演奏はできませんので」

今ので充分圧巻の演奏を聴けたのに、とブラッドは少し残念に思った。

普段の笑顔が戻ったフランスに問う。

「何でこんなに上手に弾けるのにピアニストにならなかったの？」

「手が駄目になったんです」

首を傾げるブラッド。

「がむしゃらに練習しすぎて腱鞘炎になり」

「ごめん、それなのに弾かせたりして……」

申し訳なさそうに哀しい表情をした主人に、フランスは「いいえ」と頭を振った。

「気になさらないください。多少であれば平気です。 “ ショパンのエチュード Op. 25 - 10 ” などは無理が生じますが」

「そう……ならいいんだけど」

「少し気分を変えてお茶にしませんか？」

「うん、そうしよう」

フランススがベルを鳴らし、メイドが現れる。

「ごめん、何でもない。下がって」

断りを入れた主人をメイドとフランスは不思議そうな顔で見詰める。

「分かりました」

困惑しながらメイドは引っ込んだ。

「どうかなさいましたか？」

フランススが問う。

「いや、そうじゃないんだけど……その、お前が選んだお茶が飲みたかったから」

ぼそつとそう言った主人に、フランスは目を丸くした。

「分かりました。では少々お待ちください」

そう告げてフランスは広間を辞した。

やがてお茶を乗せたワゴンを転がして戻ってくる。

「ありがとうフランス」

「いいえ、どういたしまして」

主人の労いの言葉にフランススは微笑で答えた。ブラッドは表情を生き生きとさせながら茶器を眺めている。フランススは美しい所作を保ちながら、主人にお茶を出した。

「これは何が入ってるの？」

一口啜り、香りを堪能してからブラッドが言った。

「ローズヒップやハイビスカス、オレンジピールなどをブレンドしてみました」

「だからかあ、仄かにオレンジみたいな薫りがすると思ったんだ」
「気に入っていただけましたか？」

「うん、気に入った。やつぱりお前に選んできてもらって正解だった。丁度今の気分にぴったりだよ」

「ありがとうございます」

フランススは軽く目を細め、柔らかな微笑をした。

「お前は本当に非の打ち所がないな。結婚してもずっと側に置いておきたいよ。女だったら結婚したいくらいだ」

「是非ブラッド様が望む限り、お側で仕えさせてください」

恭しい受け答えをし、フランススは茶器を整頓する。

「ところで、いつからピアノを習い始めたの？」

その問いかけにフランススは瞼を伏せた。シャンドリアの光を浴びた長い睫が、下瞼に影を落とす。過去の記憶をたどるように僅かな間を置いてから、彼の口が動いた。

「歩けるようになった頃には、母と一緒にピアノの椅子に座らされていました」

「そんなに早くから？ それじゃあ二歳か三才頃かな？」

「ええ、多分」

「それじゃあお母さんにピアノを習ったの？」

「はい」

「そうなんだあ。じゃあ、お母さんはピアニストだったの？」

フランススは頭を振った。

「いいえ、母はピアニストを志していましたがそれは叶わず、その夢を息子の私に託したのです」

「そうだったんだ…… やっぱプロになることは厳しいんだね」

ブラッドがそう言った途端、フランシスの目が鋭く光った。そこに一筋の雷光が落下したようだった。

「いいえ、母はピアニストになることを約束されていました。しかし、たった一度犯した過ちが原因で総てを失い、その道は閉ざされてしまったのです」

「どんな過ちを犯したの？」

ブラッドは慎重にそう問いかけた。彼の茶色い瞳に緊張が迸る。それが重大な事柄を表すということが分かるのに、次に発する言葉の意味を悟れないのは極めて珍しいことだった。フランシスの思考はまるで鉄壁で固められた城砦のようだった。ブラッドの持つ“直感能力”ですら見抜けないほど頑丈な。

そのフランシスの口が動き、その答えが紡がれた。

「婚約者とは別の男性にたぶらかされて恋に落ち、子を孕んでしまったのです」

「……」

相槌の言葉も見付からず、ブラッドは黙ってその話に聞き入った。婚約が決まっていた相手は、オーケストラを抱える音楽企業の重役で、母を新設するオーケストラの一員として迎える話が進んでいました。それが婚約が破棄されると同時に、相手に社会的な損傷を与えたとして名誉毀損で訴えられ、さらには今後発生するはずだったコンサート報酬、そのキャンセル料などを加えた損害賠償、合計500万ポンドの支払いが請求されてしまったのです」

「500万……ポンド？」

「その破格の賠償金は支払えず、母を音楽業界から永久追放すること以示談が成立しました」

「500万ポンドと引換に？ お母さんはそんなに凄いいピアニストの資質がある人だったの？」

「……十二歳の時ビーチャムという有名な指揮者を唸らせたという話は聞いております。十年に一度の逸材だと言われたそうです」

そう言ったフランスは苦笑し、その笑みを見たブラッドは戦慄した。フランスの美しい瞳に見たこともないものが映っていたのである。それは不純物のない純粹な悪の結晶と呼べる宝石の輝きだった。そこに決して覆せない強い意志と決意が蓄積され、おぞましいほどに深みを帯びながら瞳の奥で息づいている。同時に体中を強く締め付けられるような哀しみがそこに浮かんできた。

「それから母は両親から絶縁され、僅かな所持金だけ渡されて家を追い出され、生活は地に落ちてしまいました。——そうなれば後はどうなったか察しが付くでしょう。幸いにも容姿に恵まれていた母はその身を商売道具に換えました。あの悪の元凶である男と同じように、今度は自分が男性をたぶらかし……」

フランスは感情を溜め込むように、一旦そこで言葉を切った。

その口がまた開かれ、彼は言葉を継いだ。

「——悪の連鎖です」

「!？」

ブラッドの目の前を先程と同じ魂の激情を示す見えない雷光が迸った。

「母は自分を欲するハイエナから集めた金でピアノを買い、狂ったように私に教え込みました。六才までに『エリーゼのために』、九歳までには『バッハの前奏曲とフーガ』を習得させ、私が学校にいる時以外の総ての時間をその練習に当てさせ、夜は酒場で働くという日々が続きました。しかし生活は向上せず、母はしだいに精神が不安定になっていきました。そんな中で唯一母を笑顔にさせることができたのが、母の教えてくれた通りに私がピアノを弾くことでした。その時だけは最高の笑顔で喜んでくれたのです。そのため、私は母が笑顔になれるように、ひたすら弾くことを続けました。」

しかし段階が進むに連れて母の目はどんどん厳しくなり、私は見えない霧の中を彷徨う遭難者になってしまいました。母が積み重ね

てきた二十年というピアノの歴史を十年そこらで何を受け継ぐことができるのかと対立することもありました。しかしその感情は自分に対する不甲斐なさであることに気付いてから受け止められるようになり、母を師と思い、そのやり方に従うようになりました。

やがてその日々がようやく報われる、そう思える日が訪れました。ある時母が働いていた店の客の紹介で音楽業界に顔が利く男性と知り合い、私をレコード会社に紹介してもらえることになったのです。そして幸運にも契約の話が進み」

「凄いい、それでどうなったの？ CDは出したの？」

救いとそこに希望を見出し、ブラッドの瞳は明かりを点した。その返答にフランススは頭を振った。

「いいえ、残念ながらそれはできませんでした。契約が決まった翌日その会社から電話があり、契約が無効になったことを告げられ」

「何で……！？」

「そこにも母のもと婚約者の手が回ったのです。その業界を永久追放された責任は息子にもあるということでしょう」

「そんな……」

フランススは微笑した。それは自分自身をも嘲笑うような皮肉とも言える笑みだった。

「相手が悪すぎたようです。そうやって弱者は強い者の前に成す術もなく、簡単にその才能を潰されていくのです。」

そうなっってから母は燃え尽きてしまったかのように、その日から何もしなくなってしまうました。私が弾いたピアノの音にも全く関心を示さなくなり。働かなくなった母に代わって生活を支えるため、私はピアノに費やしていた時間をアルバイトに当てるようになりました。

こうして私達の生活場所からピアノの音は消え、廃人のように変わり果てた母親との暮らしが始まりました。生きる気力をなくし、ほとんど動かなくなってしまった母が時折ベッドから起き出した時にだけピアノを聴かせてみましたが効果はなく、母は抜け殻そのも

のでした。やがて母は音だけでなく光をも拒むようになり、家の電気は小さな裸電球の灯火を照らすだけの隠れ家に住んでいるような生活になりました。私はほとんど仕事先と学校を往復する多忙な日々が続く、ある日のことでした。明朝、呻き声を聞きつけて私が目を覚ますと、母が顔を押さえてもがき苦しんでいたのです。電気を付けて見てみるとその顔はどす黒く染まり、見たこともないほどの異常をきたしていたのです。救急車に乗せて病院に搬送したものの、病状は手の付けられないほど悪化していました。

そしてその結果母は……その日、息を引き取りました。原因は今となっては珍しい、鼠による伝染病、ペストと診断されました」

ふとフランスが壁かけ時計に目をやる。

「ああ大変だ。もうこんな遅い時間に……ブラッド様、遅くまで私の長話にお付き合ひさせてしまつて申し訳ございません」

「そんなことはない」

ブラッドは頭を振った。

「辛いことまで話してくれてありがとう。そのおかげで、お前との距離が今までより近付けた気がするよ」

ブラッドは胸の内の闇を解き明かしてくれたことと、ひと時の安らぎを与えてくれた執事に感謝するように微笑した。

「ブラッド様……」

感銘を受けたフランスの口から、思わず主人の名が零れる。

「じゃあ、おやすみフランス」

余韻を残しながらブラッドは部屋を後にした。

夜も深まり誰もが寝静まるころ、月明かりにうつすらと浮かび上がる影があった。

男性である。黒いレザージャケットに黒いズボン、と全身を黒一

色で固めている。彼は室内にある洋箆箆に歩み寄り、戸を開けた。ハンガーにかけたズボンやジャケットなどを掻き分け、その奥へと手をつ突っ込む。そこにあった靴屋の袋の中から箱を取り出して蓋を開け、その中からフック付きの紐を取り出した。それを絨毯の上に置き、箱などを元の場所に戻す。そして紐を拾い上げると窓の淵に紐のフックを引っ掛け、おもむろに彼は背後を顧みた。

「お許しください、ブラッド様……」

そう呟くと彼は紐を使って窓から飛び降り、闇の中に姿を消した。

Scene 5・『復讐』 - 1

「またお前から連絡が来るとは思わなかった。お前はもう足を洗って、この業界から姿を消したとばかり思っていたからなあ。だが、このウルフガング一家に入るといふのならいつでも歓迎するぞ」

ここはウルフガング一家の屋敷の^{アセント}一室、ボスの部屋である。高級なワインレッドの絨毯を敷き詰めた床に本棚やガラステーブル、テレビなどの調度品が並ぶ。そこに黒い牛革張りの安楽椅子に腰掛けた男の姿があった。ウルフガング一家のボス、カドマスである。彼はアーチを描く半円形の大窓から、その奥にある景色を眺めていた。その首が動き、視線が脇に移動する。その眼がある人物の姿を捕らえた。彼はお気に入り椅子からおもむろに立ち上がるとその人物に歩み寄った。目や口の端から邪な笑みが零れる。彼は相手を値踏みするようにその姿を隅々まで見渡した。

長身で引き締まった体を全身黒い服装で固めている。金糸のように光沢のある髪と清涼感のあるグレーの瞳が際立って見える。そこに気の乱れや隙はいつさい感じられなかった。その完璧な佇まいに魅せられ、カドマスは背筋から凍りつくような戦慄と渴望感がこみ上げるのを感じた。

「今日ここに来たのはその件ではない」

低い男性の声が静かに響く。と同時に音も立てずにその男性の手が閃き、忍ばせていた銃がカドマスの脳天に突き付けられた。カドマスの双眸がぎんぎんに開かれる。カチツという音が頭蓋骨の中で反響した。それが警鐘となり、本能的に彼は声帯を萎縮させた。恐怖という鎖が全身をがんじがらめに縛りつけ、逃れようのない密室の恐怖へと引きずり込んでいく。

再び男の声が静かに発せられた。まるでこの屋敷内には今、この男とカドマスの二人しかいなかったと思えるほど静寂な室内に、その声が凜と響く。

「貴様は覚えていないだろうが、オレの母ナターシャは貴様と行きずりの関係を持った女の一人だ。母は貴様の子供を孕み、それが原因で絶縁された。そして、底辺に落ちた貧しい生活の末、不衛生な共同住宅に巣くう鼠の菌に伝染し、その病で死んでいった」

「……！」

カドマスの顔が血の気を失う。それは恐れとも、驚きとも、錯乱ともとれる表情だった。

「その顔は何に対する感情の顔だ？ 母の訃報を聞いて悲観したからではあるまい。貴様にとってはそんなことは、どうでもいいことだろうからな」

頭部に銃口が強く押し付けられ、何かが軋むような音と感覚が伝わる。

「ま、まま待て……っ！」

カドマスは恐怖に慌てて手を振り懇願した。

「何だ」

男が手の圧力を弱めずに問い返す。

「お、お前は私の子ではないのか？」

「それが何だ」

「お前は実の父親を殺すというのか！？」

カドマスの声が恐怖に震える。男は目を細め、冷淡にカドマスを見据えた。

「オレに父親が必要だと思うか？」

「あ、当たり前だ。お前が望むのなら私の息子として認知してやつてもいい。……それだけではない。私が引退した暁にはこのウルフ・^{ボス}・ガングファミリーの棟梁の座を引き継いでもらっても構わない」

「……」

「わあ、何をする——！？」

男が胸元からもう一丁の銃を取り出した。その弾層を回転させ、そこで一旦手を止める。

「天に聞いてみよう、どちらの意見が正しいか。オレが正しいければ、

貴様が死に。貴様が正しければ、オレが死ぬ」

「お前……正気か!？」

「やらないのなら……」

「待て!？」

「……」

「やるから、その前にこっちの頭に向けた銃を退けてくれ。これでは生きた心地がしない」

「分かった」

男が頭に突き付けていた銃を退ける——とその瞬間カドマスが二ヤリとした。

「馬鹿が……!」

そう愚弄し、素早い動きで懷に手を入れる。

「!？」

「何の真似だ」

同時にカドマスの眉間に銃が突き付けられた。

「……くっ!」

カドマスは弱々しい呻き声を漏らし、苦悶に表情を強張らせながら、やむなく男に向けた銃を下ろしていく。

「では始めようか」

淡々とした口調で男が言い、弾倉を回転させた。その直後に何のためらいもなく自分の頭に銃を向ける。

「まずは一回目」

そう言つて彼の指が引き金に伸びる瞬間、カドマスは胸中で吐き捨てた。

気違いめ、死ぬ——!

すぐに引き金は引かれた。カドマスの呪いの言葉が懇願の意味へと変わる。——死んでくれ……

だが、銃声は響かなかった。

「貴様の番だ……」

そう言って男がカドマスに銃を渡す。カドマスは心肺停止に陥りかねないような形相と緊張感でその銃を受け取った。

「先に言っておくが、今度おかしな真似をしたら……——次はないと思え」

「ちっ！」

受け取った銃の先を自分の頭から離そうとした瞬間言われたその一言に、カドマスは舌打ちした。

「安心しろ。オレは貴様のような小細工はしない。これは“フェア”なゲームだ」

カドマスは男を締め殺してやりたくなった。血眼になってその相手を凝視する。

「くそ……っつ！」

「Good luck」

己——……っつ！

神に対する懇願ではなく、敵に対する激しい憎悪の叫びが脳内に木霊した。カドマスの指が小刻みに微動し、その震える指が引き金に伸びる。

「……！」

極限状態に陥り、額からあぶらあせが噴出す。奥歯を噛み締め、彼は引き金を引いた。

「っ……！」

脳天を乾いた音が貫く。男は冷淡な目でその様子を見詰めていた。銃はこの時も不発に終わった。

「ふふ……次はお前の番だ」

「……」

カドマスは興奮のあまり呼吸を荒げ、口の端から垂れたよだれを手の中で拭いた。彼は興奮で震える手で銃把を握り、上目遣いに男を見据えてそれを手渡した。

「Good luck」

受け取る男にそう声を掛けるが

— G o t o H e l l —

地獄へ落ちろ

胸中ではそう呪っていた。

S c e n e 6 ・『復讐』 - 2 (前書き)

修正しました。

Scene 6・『復讐』 - 2

「三回目」

男が自分の頭に銃口を当てた。

「……」

引き金に指が伸び、じわじわと動いていく。

——早く引け！ 何を溜め込んでいる。怖じ気付いたか？

カドマスはためらい勝ちな男の鈍重な動きに苛立ち、心の中で地団太を踏んだ。

「！？」

と、男の鋭い視線がカドマスを貫いた。

「これでお終いだ」

静かにそう言い、男は引き金を引いた。

短い炸裂音が室内に弾けた。脱力し、床に頽れた男にカドマスが歩み寄る。男の身体をひっくり返し、その顔を自分の方に向かせる。開ききった眼に手を滑らせ瞼を閉じると、長い睫毛がその縁を飾った。

「ふっ……こんなに綺麗な屍体は初めて見た。——死に方も綺麗で良かったな、“ウイングス”」

男の金色の髪が朱の花弁が開くように血で染められていく。

「ふふ……安心しろ。お前の死を無駄にはしない」

カドマスは上着のポケットから携帯電話を取り出すと、メールを仲間宛てに一括送信した。

「ふふふ……」

気分が高まり笑いが込み上げ、脳内にアドレナリンが分泌されていく。

「はっはっはっはっ……！」

野心に満ちた双眸をぎらつかせ、哄笑しながら室内をうろつろと歩き始める——その時、ドアが開いた。

「やっと来てくれたか……」

したり顔でカドマスは背後にあるドアに首を巡らせた。その向こうから次々と構成員が部屋に入ってきて来る。

「おい、敵ならとつくに死んでるぞ？」

仲間達の銃口が自分に向けられ、カドマスは苦笑でそれを受け流そうとするが、仲間達は銃を下ろそうとはしなかった。しだいにカドマスの顔に焦りの色が浮かんでくる。彼は今、自分の身に何が起っているのかを把握しようとするが、その原因を解明できずにいた。

ふとそこに低い声がした。

「裏切り者は誰か」

カドマスは声のした方に素早く身体ごと振り向いた。

「ウイングス！？ お前、生きてたのか……」

そこに上体を起こし、床からゆっくりと立ち上がる“ウイングス”の姿があった。そのグレーの瞳に冷笑が浮かんでいる。

「こんな芝居に騙されるとはな。ウルフガングのボス、カドマスも大したことはないということか」

そう言い彼が髪をさつと撫でると魔法のように一瞬で血痕が消えた。発砲したと思われた銃はまだ僅かに燦っている。

「これは総て手品だ^{マジック}」

ウイングスは金色の髪を後ろに撫で付け、淡々とした口調でそう告げた。その台詞がカドマスのプライドを逆撫でする。

「貴様……小細工はしれないと言ったのは嘘だったのか!？」

苦々しげに顔を歪ませて、カドマスは吐き捨てた。悔しさに奥歯を噛み締め、握り締めた拳をわなわなと震わせている。

「考えれば分かと思うが……オレはお前を殺しにきたんだ。それを仇も討たずに自ら死ぬ危険性があるようなことをするわけがないだろ」

「……」

カドマスは言葉に窮した。こんな無様で屈辱的なことがあるものかと、ウイングスと仲間達の様子を伺うように交互に見据えるが、どちらもその姿勢を覆すことはなく、彼は袋の鼠になっていた。

「ボスを連れて行け」

ウイングスが促した。それを合図に構成員達が動き、ボス（カドマス）を取り囲む。

「何をする…… お前達正気か？ オレをどうする気だ——！？」

カドマスは四方から銃口を突きつけられ、両腕の動きも封じられてもがくように叫んだ。

構成員の一人がその背中に銃口を押し当てる。

「オレ達にけじめの付け方、見せてくださいよ——ボス」

言って彼はカドマスの眼前に鍵をちらつかせた。弄ぶようにそれを揺らす。

「テッド、お前……」

それが今自分の上着の内ポケットから盗まれたと知り、カドマスは舌打ちした。その男は五年ほど前にロンドンに移ってきて、他のマフィア一家の一員の財布を摺って危うく殺されかけているところをカドマスが拾ってやったのだ。その恩を忘れたか……カドマスは憎悪を込めて内心で悪態をついた。構成員達により強引にその部屋を出される。

重厚な鉄扉が閉まる。その音だけが間延びしたように室内に反響した。連れてこられたのは地下室だった。分厚い壁で外部の音を遮断し、室内の音が一切漏れない構造になっているこの部屋は、カドマスが多目的で利用する部屋だった。鍵は彼が保管しており、構成員もカドマスの許可なくしては入ったことがない。先程彼の懐からテッドが盗んだのはその鍵だったのだ。

「お前達、オレを嵌めたのか？」

呻きのような声が漏れた。カドマスは苦悩に頭を抱え込む。するとウイングスが切り出した。

「言っておくが、奴等はお前の考えているような意味で現れたのではない」

「どういうことだ。説明しろ!？」

カドマスが抱えていた頭から手を離し、顔を上げてウイングスに視線を走らせる。

ウイングスは冷淡な瞳でカドマスを見据えて言葉を紡いだ。

「ある人物がオレに入れ知恵し、この計画が実行されたのだ。奴等はそれを未届けに來ただけだ」

そう言い、顎を使つて背後の構成員達のことを差す。

カドマスの方は今の説明で余計に頭が混乱し、頭を振つて怪訝そうにウイングスを見詰めた。

「さっぱり分からん……」

それを受けてウイングスは淡々とした口調でさらに説明を続けた。
「オレが死んだらお前がその屍体からDNAを採取するために、真先に仲間を呼び集めると言っていた。そして実際その通りになった」

「ある人物とは何者だ!？」

その問いにウイングスは少し間を置き、含ませるように言った。

「お前の“血縁者”だ」

「血縁者……だと?」

カドマスの表情が凍結し、目が見開かれたままになった。その表情に困惑と不安の色が混ざり合う。彼はその裏切り行為が身内の仕業であることに焦りの色を隠せずにいた。

「誰なんだそれは? 誰に聞いた? いったい誰がそんな話を……!？」

「お前に非常に近い血縁者だということまでは教えてやる」

そのじらすような言い方にカドマスは耐え兼ね、引きつった口から前歯を剥き出しにして毒づいた。それは弱い犬が相手を警戒して、

逃げ腰になりながら威嚇する姿に似ていた。彼は唸るような声で、続く疑問を投げ掛けた。

「誰が言った……レッドか!？」

その彼を蔑むような目で見詰め、ウィングスが冷めた声音で突き放すように答える。

「それを今知る必要はない」

「何だと？」

カドマスは表情をさらに険しくさせ、眉間と鼻の付け根にくつきりと深い溝ができた。

「その疑問は墓場まで持って行け」

「……!」

「お前が犯した罪により、二人の人間の運命が狂わされてしまった。——その罪を償ってもらう。銃を取れ、今からオレと一騎打ちの勝負だ」

ウィングスが懷から銃を取り出す。愛用のリボルバーS & W 60だった。無機質な銀色に輝いている。

「く……っ」

情けを微塵も感じさせないその言葉にカドマスは絶望し、だが諦めてその勝負を受ける態勢に入ることでもできなかった。手が、身体部位の一つ一つが油が切れた旧式の機械のように作動不慮を起こしている。これでは素早い動きなどできるはずもなかった。

「丁度良い機会だ。お前の仲間達もボスの实力を見たがっていた。今ここでそれを見せてやればいい」

「……っ」

カドマスは言葉に窮し、助けを求めて仲間達に目配せした。

「やめろ。堂々とした一騎打ちに助けを求めるような負け犬をボスとして認めると思うか？ そんなことをすれば今よりもっと惨めな

……」

「黙れ!」

カドマスが叫んで話を遮断する。彼は自分の企みを全て見通した

ように言い当てられ、それ以上聞いていられなかったのだ。それは威厳を保とうとする姿であったが、見ていた者の目には駄々を捏ねているようにしか見えなかった。

「無駄な悪足掻きはよせ。母が死ぬまでの想像を絶する有様を目の当たりにしたオレに、貴様を許すことはできない」

ウイングスの低い声が強い憎悪の念となってカドマスに迫り、恐怖心を煽る。

「ま、待て……！」

カドマスが慌てふためき、両手を前に突き出して制止する。

「何だ」

ウイングスが冷たくそう聞き返し、小さく安堵したカドマスは口の端に引きつった微笑を浮かべた。

「私より、彼女を陥れたもと婚約者こそ殺されるべきではないのか？ その男が権力を盾にして、破格の損害賠償請求や彼女の才能を潰すような真似をしなければ、そんなことにはならなかったはずだ！」

その主張にウイングスは瞼を伏せた後、冷酷な眼差しで返した。

「貴様との過ちがなければ総てが上手くいっていた」

その言葉の重圧がカドマスに重くのし掛かる。的を捕らえた照準器のように、ウイングスの視線がカドマスの目にぴたりと重なった。「運命を呪え。自分が犯した罪を嘆け。これは血族同士の因果の法則だ。貴様を殺すまでこの復讐は終わらず、死ぬ以外にこの運命からの抜け道は存在しない」

この世でただ一人、血の繋がった実の息子の無慈悲な言葉にカドマスは戦慄した。父を憎むその念が、息子の清涼なグレーの双眸にまざまざと浮かんでいる。彼の母親との記憶は朧気ながらも、息子のその類いまれな美貌を見ていると在りし日の彼女の姿が目には浮かんでくるようだった。自分を見据える息子の眼差しが、死んだ彼女の眼差しに見えてくる。その眼が悪事を捌く首切り台の刃となってカドマスに迫っていた。弁解の言葉を述べる余地も与えられず、そ

の首が今から切断されようとしている。

「銃を取れ。装填を済ませ、引き金を引くだけで撃てる状態にしろ」
「……っ」

カドマスは窮地に立たされ額に冷汗が滲み、手も汗ばんでいた。彼は負けると分かっている勝負に踏み切ることができなかった。

これは神が与えた罰なのだろうか？

神は実の親を殺める息子に味方したというのか？

なかなか動こうとしないカドマスに、とうとう痺れを切らしたウイングスから無情な言葉が飛んだ。

「時間切れだ」

彼の握るS&W60の銃口がカドマスに向けられる。

「まっま待て!？」

慌ててカドマスが片手を上げてそれを制止する。

「……」

しかしウイングスは銃を下ろさなかった。

「早く準備しろ」

冷酷にそう告げる。

「わ、わわわ分かった……!」

カドマスが声とともに震える手でその準備を済ませる。そして怪訝そうな目で息子を見据えた。

「ウイングス」

「何だ？」

「また何か細工してるんじゃないだろうな？ ……お前は手品も使えるし、信用できん」

「ふっ……疑り深いというより、往生際の悪い奴め……」

ウイングスは毒づいて上着を脱ぎ、さらにその中に着たＴシャツも脱ぎ捨てる。床に黒のレザージャケットと白いＴシャツが落ちた。半裸になり、ひき締まった大胸筋と割れた腹筋が露になる。

「これでいいか？」

「ああ……」

まだ納得しなかったが、丁度良い言い訳が見付からず、不承不承ながらもカドマスは承知した。

「それを持って行け！」

カドマスが荒々しい口調で言い、構成員が脱ぎ捨てられた服を回収する。

「くそぉ……っ」

カドマスは苦しげにそう小さく悪態をつく。ボスの座を引き継いでからずっと殺される日が来ることを恐れてきたが、それがこんな形で訪れるとは思いもしなかった。赤の他人として疑うこともなくその才能を高く評価していた人間が、いきずりの関係を持った女との子であると知らされ、拳句の果てはその実の息子と戦わなくてはならないとは……！

その激情の矛先を向ける場所が見付からず、カドマスは自身の中でもがき狂い、憐憫の沼に溺れるしかなかった。

「お前が負ければそれまでの男だったということになる。奴等に弱いボスはいらない。死ねば、別の人間がそれに取って代わるだけのこと。生きたければ、オレを殺せ」

ウイングスの抑揚のない声が静寂の室内に響く。

カドマスは、目前となった死の恐怖に発狂しそうな自分をどうにか抑え、全神経をウイングスの動きに集中させた。室内を視線だけで右往左往しながら仕掛けるタイミングを計ろうとするが、一向にそのタイミングを掴めなかった。

——相手はオレが撃とうと手が動くその瞬間を待っているのだ。

自分からは撃つてこないだろう。もし僅かに望みがあるとすれば、奴はまず一発しか撃つてこれないということだ。奴の銃は単発しか出せないリボルバーだ。だが、こっちの銃は連射が可能な自動式拳銃^{オートマチック銃}。奴が一発目を外せば次の発砲までに遅れが生じる。その時を狙

えは……

カドマスはその一縷の望みに賭けてみることにした。

S c e n e 7 ・『裏切り者』・1 (前書き)

あけましておめでとございます (^ ^)

なるべく早く更新できるようにがんばるので、どうかお付き合いくださいませ。

今年もよろしく願いします (^ ^) m ^ p u r i

Scene 7・『裏切り者』 - 1

二日前ウイングスの携帯電話に“Mr・X”を名乗る人物からの怪しいメールが届いた。その内容は短く

“明日、お前宛てに宛名のない手紙が届く。それを誰にも見せずに開封しろ”

と書かれていた。

そして翌日、メッセージにあった通り、彼宛てに宛名のない手紙が届いた。それを開封するとMr・Xの携帯電話番号が記されており、彼は隙を見て仕事の合間にその番号にかけてみた。

《……Mr・Xだ》

スピーカーから低い声がした。出たのは男性だった。その声はくぐもっていたが、音声変換機などを使用しておらず、地声のようだった。懐疑的な面持ちで彼が端末のスピーカーに耳を澄ましていると、その向こうから高笑いが聞こえてきた。

「……」

悪戯か？ と不快に思った彼が電話を切ろうとすると、相手が笑いも冷め止まぬまま慌てて呼び止めた。

《おっと、切るなよ！……ひっひっ》

「……」

ウイングスは答える気になれなかったが、

「誰だ？」とそれだけ質問した。すると微妙な間を置いてから相手が答えた。

《私はルパート。ウルフガングのボス、カドマスの兄だ》

「ルパート？」

ウイングスは訝しげに呟いた。

「カドマスにそんな名前の兄弟はいないはずだが」

冷淡にそう付け加える。すると沈黙が返ってきた。

「切るぞ」

やはり悪戯だったかとウイングスは呆れ気味に冷たくそう切り出した。するとスピーカーから相手の声が漏れ出し、彼は再び端末を耳に当て、その話に耳を傾けた。

「……詳細は会って話す。今晚二時過ぎ、リッチモンドヒル・ホテル前に来い。そこをうるついでにいれば車で拾って行く。目印はダークブルーのベントレー（車種）と片手に白い手袋を嵌めた男だ」
そこで会話が終了し、ウイングスは折り畳んだ端末を上着のポケットにしまった。それから、再び“表の仕事”に戻った。

表の世界に住まう人間の顔になり、何事もなかったように仕事をこなしたウイングスは、その機会が来るのを待った。

やがて指定された時間が近付くと彼は勤め先である屋敷の自室から抜け出す準備を整え、全身黒の出で立ちに身を包み、部屋に隠し持っていたロープを使って窓の外に降り立った。彼はコードネーム——“WINGS”——の由来に相応しく、虫の羽音のごとく静かに動作を進めた。知り尽くした屋敷の防犯装置にも捕まることなく、鮮やかな身のこなしで屋敷から門へと続く通路を駆け抜けていく。その敷地をぐるりと囲んだ鉄条網と門との境目に聳え立つ外壁を登って乗り越え、屈伸を使つての軽やかな着地をする。靴底が衝撃を吸収し、彼は大気を切る黒い影となって指定された場所へと駆けていった。

夜道を徘徊するのは車が怪しげな男だけだった。ウイングスもその景観の一つとなる。全身黒で統一した服装は闇に溶け込むが、明かりの下に來るとその美貌が浮かび上がる。金髪の下に秀麗な顔を覗かせ、彼は歩道の傍らに立ち止まった。腕を組み、そこから通行する車に視線を走らせる。と、数分ほどで一台の車が停車した。闇の中で俄かに車体を青光りさせたダークカラーのベントレーだった。彼が歩み寄り車内を覗き見ると、片手に白い手袋を嵌めた男がハンドルを握っていた。運転手の男がウイングスの姿を確認すると、手

袋を嵌めた左手を閃かせて乗車を促し、ウイングスはその車に乗った。まもなく発進したその車は、テムズ川方面に向かって進んでいった。

Scene 8・『裏切り者』 - 2

車は西に向かつて走っていた。途中で北に折れ、テムズ川上流へと向かった。車内での会話は交わされることなく、沈黙の走行が続く。やがてその景色の奥に、アーチ型の橋が見えてきた。テムズ川に現存する橋の中で最も古いとされているリッチモンド橋だ。それが見渡せる川の畔で車は停止した。

「降りろ」と運転手の男が顎をしゃくった。ウイングスは黙って車を降りる。上着を着ていなければ身震いするような冷気を帯びた風が吹きぬけ、全身を総なめにした。その闇の中から人影が現れ、小さく靴音を響かせながら歩み寄ってきた。

「よく来たな、ウイングス」

その声は昼間電話口から聞いた声と同じものだった。男は続けて電話で聞いたのと同じ名を名乗った。暗闇に順応した目がその姿を捕らえる。やや高めの背丈にシャツとズボン、それにベージュのハーフコートを羽織った紳士風。表情は闇の帳にぼやけているため臆気ではあるが、その声の調子から笑みを浮かべていることが窺える。ウイングスは数歩の距離を置いて男と対峙した。

「早急に済ませろ」

ウイングスが先に切り出す。

「ふふ……分かつている。今のお前は半身——いや、それ以上が裏の世界から抜け出し、片足だけが浸かつている状態だ。その経歴を暗黙の闇に封印し、普段は平穏な暮らしに住まう人間に同化している。輝かしい経歴のみで塗り固めた慇懃な執事を演じ、“表の人間”に成り代わっているのだから……私の可愛い甥、“ブラッド”の」

グラスに入れたワインを転がしてテイスティングするように、じっくりと自分の言葉に堪能しながら話す男をウイングスは一瞥した。「そんな前置きはいい。早く本題に入れ」

「ふふ、そうだな。では話そう」

男は薄ら笑いを語氣に含ませ、自分のペースを崩さずに言葉を紡いだ。

「マドックには双子の兄弟がいた。瓜二つの一卵性双生児の兄が」
ウイングスは怪訝そうに眉を潜めた。

「マドックに双子の兄がいたことは知っているが、持病の喘息を患って幼くして他界したはず」

男は頭を振ってそれを否定した。

「その子供は本当の兄弟ではない。生後まもなく病院側の手違いで、取り違えられた赤の他人だ」

「取り違えられた？ 何の根拠が……」

「まあ、三十年以上も昔のことだ、証拠を見付けるのは難しいだろう。当時の責任者を探し出して訴えを起こそうという人間もいないだろうしな」

男は懷に手を差し込んで煙草とライターを取り出すと、片手で風避けを作って点火した。馴れた手捌きでオイルライターを力チツといわせて蓋を閉じ、懷にしまう。

「マドックの顔を見たことはないのか？ あれはそっくりだぞ」

男は煙草を吸い、笑いとともに鼻から煙を吐き出した。そこでまた話が途切れ、ウイングスの口調が怒気を孕む。

「世間話はどうでもいい。要点だけを言え」

「おっと、すまない」

苦笑気味に言った彼に、この男は人を焦らして怒らせる達人だろうと思うウイングスであった。

「……カドマスはそのことを知り、マドックに強い憎しみを抱くようになった」

男は演出するかのようになり、語尾だけ声を潜めて言った。齒の隙間から漏れた息が笛のような音を立てる。

「皮肉にも二人は同じクリザリングという姓の家庭に育てられ、片や裕福な一般家庭。もう一方は犯罪組織として、闇に潜むマフィア

一家という全くの別世界を生きる運命を辿ることになってしまった。そのことを知るきっかけとなったのは“レッド”の存在が深く関わっている」

男はそこで言葉を切り、煙草を口にした。ウイングスにはその時間ももどかしかった。彼は夜が明ける前に帰らねばならないのだ。

――“表の世界”に生きる人間に戻るため……

「レッドがどうしたんだ？」

彼は鋭く問い質した。声音にその苛立ちが混ざり、殺伐とした空気を醸し出す。

男は二口目の煙草を深く吸ってから地面に落とし、革靴でじりじりと踏み消した。上着のポケットに手をつ込んでから言葉を継ぐ。「……レッドは人口受精によって産まれた子供だった。母親は身体が弱かったため、代理母の子宮に受精卵を移して出産させた。その代理母となった女は双子を出産したが、入院中突如病院を抜け出し、双子の一方を連れて行方をくらました。誰かとつるんで計画していたらしい。警察の調べにより、病院に勤めていたナースの中で、一人身元を偽造した人間がいたことが後に判明した。結構有名な事件だから、お前も聞いたことがあるんじゃないか？」

「さあ、記憶にないな」

ウイングスは冷たく一瞥した。秀麗な眉目は夜闇の中に溶け込んでいるが、それを形作る影だけでもその美しさは窺えた。冷たい夜風が柔らかな金色の髪を泳がせる。顔にかかった髪をどける仕草さえも様になる長い指。彼の美貌は母親譲りのものだった。復讐という一つの目標を果たすために貫いてきた強い意志が、それをさらに際立たせ、総毛立たせるような畏怖に似た美しさを与えている。皮肉にもそれは憎悪が生み出した宝石の輝きであった。彼にとって少年時代とは、過去に浮かび上がってくる記憶は、ほとんどが闇の色に染められていた。

「だが女はすぐに見付かった。路地裏に倒れて死んでいるところを……」

背後から腹部を刺せたらしく、路面にはおびただしい血の海ができていたという。男はタバコの煙を吐き出した口の端に、怪しげな笑みを浮かべながら言った。

「……」

ウイングスは反応を示さなかった。ふいに生じた川面を撫でる風の唸りが、それに答える。

「攫さらわれた子供は、その時すでに闇に流れていた……」

意味ありげな間を置き、男は再びタバコを口にした。

「それも報じられたことか？」

ウイングスは嫌疑の言葉を投げかけた。全てを見てきたことのように話す男の漂わせる芳香に胸焼けがしていたのだ。男は

「ふっ」と鼻で笑って軽くあしらった。

「子供はマフィアの手に渡っていた」

「女はマフィアの男の愛人だったということか？」

「……ふふ」

男は答える代わりに笑声を漏らした。

ウイングスは思案した。女は自分の腹に宿した子供に情が湧いたから子供を攫った。そうは思えなかった。女は利用されただけだ。

それゆえに用がすんだとばかりにすぐ始末されたのだろう。子供を奪った目的はもっと別のことにある。裏に何かがある。ウイングスは嫌疑をかけるように、闇に埋もれた相手の顔を見据えた。

「そこである奇妙な偶然が生じた。そのマフィア一家の一人が、子供の父親と非常によく似ていたのだ。——それが何を意味しているか、“私”は非常に興味惹かれた」

男はそう続け、闇の中でニヤリとした。男が示唆する意味をウイングスは問わず、男が話の独走を続ける。

「さっそく二人のDNAを調べてみた。……すると面白い結果が出た。二人のDNAが一致したのだ。くくく……驚いたよ。まさに奇跡の邂逅だ。双子が互いを引き寄せ合ったのかもしれない。実に感動的な実話ノンフィクションだと思わないか？」

「……」
もったいつける男の話し方に、付き合いきれなくなっていたウィングスは黙殺した。男は意に介さない。演技の色がさらに濃厚になっ
ていく。

「ところがそれは怨念を生む、復讐までの序章となってしまうた」
男は新たに煙草を一本取り出してオイルライターの火を付けるが、
今度は風に苦戦して体の向きを変えた。やっとタバコに火を付けて
から向き直る。

「弟のマドックは通り魔によって殺害された。可愛そうに、即死で
はなかった。痛かっただろう。どんなに苦しかったことが……病院
で生と死の狭間を彷徨したに違いない。意識のない精神の中で虚空
を掴み、その手を白い布切れを身体に巻き付けた金色の巻き毛の天
使が、白い翼をはためかせ、彼を天へと導いたのかもしれない」

男は感情を込めてそれを語り、しばし思いを馳せるように天を仰
いだ後、肩を落として嘆くように頭を振った。^{かぶり}

が、闇の中でその表情を一変させた。悲観に暮れて潤んでいた目
が、邪悪な嘲笑いの半月刀に変わる。

「誰」が殺したのだろう」

低い声音で紡いだその言葉は冷たく響き、そこから笑いが聞こえ
てくるようだった。

「殺される前のマドックは何かに怯えているようだった。誰かに付
け狙われていたらしく、長兄のリチャードが相談を持ち掛けられた
と言っていた。彼の推理では、マドックは何か知ってはいけないこ
とを知ってしまったのかもしれないということだった。……知りす
ぎることは危険でもあるからな」

「何故含むような言い方ばかりする？ お前はいつたい何を知って
いるというんだ。何を隠している！？」

苛立ちが喚起したウィングスは烈しく切りかかった。延々とこん
な架空か現実か分からないような話を聞かされるのにはうんざりし
ていた。

僅かに生じた沈黙の後、男の口が言葉を紡いだ。

「まあ、そう先を急ぐな。時間のことを気にしているのなら、大丈夫だ。話はもうすぐ終わる。終わったらうちの車で屋敷の側まで送ってやるから安心しろ」

ウイングスは腕を組み、「続ける」とだけ低声で言った。機嫌を悪くした彼の様子を喜ぶように、男は淫猥な笑みを浮かべた。

「カドマスは弟への恨みをはらしたことで目的意欲を無くしてしまった。そうなった今、彼は喪失感からボスの座を降りたいと思っており、^{ファミリー}構成員の連中もそのことに薄々気付いているはずだ。カドマスは闇の業界には向かない平凡な人間だからな、大した悪知恵も働かない。今のウルフガング一家は闇のまた奥に潜む闇を徘徊するハイエナと化している。そしてカドマスは既に次代のボスに成り替わる人材を探している。実の息子ではないレッドに執着心はなく、一門ではなくても構わなとも思っているくらいだ。そこであいつが目を付けたのがウイングス、お前だ。

ところが、お前はこの業界から去ろうとしている。ならばそのDNAだけでも——とあいつは考えた」

「DNAだと？ それを使って何をしようというんだ。その遺伝子を受け継いだ子供でも作るのか？」

男は頭を振った。

「それよりもっと効率的に使用する。遺伝子の必要な情報だけを組み合わせる、または組み替える。遺伝子組み替え食品のように」

「そんなことが可能なのか！？」

「科学は進歩している。人間の遺伝子操作はその技術の応用だ。人間も遺伝子組み替え食品と一緒にいうわけだ。

そのうちこの世界は、美男美女、秀才、天才しかいなくなるだろう。——そうなる日も遠くはない」

「何を根拠にそんなことが言える？」

「——私がその研究を成功させた“第一人者”だからだ」

「！？」

「そこでだ。ウイングス、お前に協力してほしい」

「何をだ？」

ウイングスは訝しげに眉を潜めた。

「あいつはウルフガングのボスとして相応しくない。そして、弟のマドックを手に掛けた身内殺しの悪魔だ。ウイングス——あいつを始末してくれ」

「……」

「オレの弟の分“も”、かたき仇を討つてくれ」

「！？」

「ふふ……お前の“母親”の仇と一緒にな」

「何故そのことを……！？」

ウイングスの秀麗な眉目が危惧に歪む。

「ふつ、マフィアの情報網を甘く見なるな。お前の過去を洗いざらい調べさせてもらった。母親とカドマスのこともな」

「……」

「……っ」

カドマスは銃把を握る手掌が生ぬるい汗に濡れていくのを感じていた。心臓が破裂しそうなほど激しく躍動している。動脈、静脈、毛細血管、全身のあらゆる血管を流れる血液の勢いは止どまることを知らなかった。それは窮状がもたらした異常なまでの緊張感であり、彼は狂いそうな精神状態にあった。しかし依然としてなくならない理性が存在し、それがいたぶりのようだった。

ウイングスは、上半身が無防備にさらした姿でありながら隙がないように見える。カドマスはこの時ジャケットの下に防弾ベストを着用していたが、安堵は訪れなかった。敵がそんな単純なことを念頭に置かないわけがない。さらに至近距離から撃たれば、このベストでは防御しきれない。そして今ウイングスが手に持っている銃は38口径のリボルバーだが、何の弾が込められているのかわからない。もしマグナム弾などが込められていたら危険度はさらに増す。周辺には遮蔽物になるようなものは何一つなく、隠れて機会を伺うこともできなかった。

カドマスは呼吸を徐々に遅らせて、心臓の躍動を鎮めようとした。それが人が歩く程度の速度まで落ちた時、彼はその速度で死地への階段を登る人となっていた。

最初の一撃。

銀色の銃口から火花が散った。不意の一閃がカドマスの顔の左側面を霞めた。ウイングスが撃った弾だった。カドマスは反撃に転じることすらできず、銃を構えた姿勢で呆然と直立していた。ウイングスの足下に空薬莢が転がる。彼は引き金を引いた。撃鉄が起き、連動して弾倉が回転する。発射の準備態勢が整えられた。

彼は冷然とした眼差しでカドマスを見据えた。

「何を思っている？」

「……」

ウイングスの問いにカドマスの唇は言葉を紡げなかった。ウイングスを、その背後に広がる光景を見る双眸が、焦点を失った硝子玉と化している。

「一発も撃たずに死にたいのか？」

「あうあ……！」

言葉にならぬ喘ぐような声を漏らして、カドマスは後退した。

ウイングスは距離を詰めずに言った。

「弾がなくなる。——次が最後だ」

「?……」

カドマスの眼にうつすらと生色が蘇った。

「弾はあと二発。それを外せば必然的に撃てなくなる」

それ以上は口にせず、ウイングスは銃を構えた。その視線がまっすぐ自分へ向けられていることを感じながら、カドマスは両目を血走らせ、狂ったような歪んだ笑みを浮かべた。鼻腔から笑声が漏れる。

「二発……」

そう呟いた。

ウイングス（奴）は総てをその二発に賭けてくる。一発では終わらせないはずだ。長年の怨みを募らせてきた奴は、一発目で動きを封じ、二発目で止どめを刺すに違いない。危険なのは二発目だ。

その推理がカドマスに不可解な自信を与えた。8メートルほど離れた位置に立つ敵の動きに全神経を集中させて観察しながら、カドマスは覚悟を決めた。

“二発目”

それを呪文のように胸中で唱えた。それで総てが決まる——

カドマスの表情が一変した。怯懦に狂いかけた敗北者のそれではなくなっていた。一発目で身を挺して相撃ちを狙い——

カドマスは心はそう定まった。

息子よ……

「わああああ——っっ！」

死ね！

自らを鼓舞し、奮い立たせるかのような喚声を上げ、カドマスは勝負に出た。斜め方向に走って急停止し、素早く身を翻して銃口をウイングス敵に向けた。そこから銃声とともに火花が散る。

一撃。

錯乱したかのようにも思えたが、彼はがむしゃらに乱射はしなかった。その一撃が彼の意志を具現化したように、空間を突き破る一弾が標的に向かって直進していく。

彼の腕に狂いはなかった。銃弾はウイングスの右胸を突き破る。

その光景が目には浮かび、カドマスは眼前の闇が一気に開けた感覚を味わった。

「ひっひっ……」

カドマスは喜々として引きつった笑いをその顔に浮かべた。

「——？」

しかし、それがふと目覚めた瞬間のように、突如五感が鮮明になった。

「あっっ……」

視界が別世界

ではなく、それが真の世界を反映した。

死の恐怖から逃がれようとして自らが作り上げた“仮想現実”の幻覚などではなく、“真の世界”を。

それを目撃した瞬間。カドマスの眼、表情は血の気を失った。

「……」

真の危機が迫る瞬間を捕らえた時、その映像はスローになって目に映った。同時に自身の動きまでもがそれに合わせて鈍重になって

いた。逃れることもできずに恐怖がスローで忍び寄る。死が意識の中枢に刻印され、呪縛の鎖が手足の自由を封じ、魂が身体から剥離したような感覚を覚える。信じられないことに、相手の銃口から飛び出した弾頭が、軌跡を描いて自分に迫ってくるのを眼が捕えていた。遅れて自分が撃った銃の弾道が見える。相手の肩に命中した。

否、肩は横にスライドし、弾頭は無人の空間を貫いた。その延長線上の壁にめり込む。

「……っっ」

カドマスの視界に映る天井と床が逆転した。頭部、肩、背中を強烈な打撃が襲う。

「あうっ！」

思考が拡散した。何重にも重なる苦痛が怒濤の猛威となって押し寄せる。腹部が焼けるように熱かった。呼吸の振動が傷口を圧迫する。大量に流れる血液が、体温を奪っていく。震える手を腹部に持つていくと、みるみる血液の紅に染められた。

弾は……弾はどうなった。腹に残っているのか？ その懸念が脳裏を奔走する。腹に爆破装置を埋め込まれた恐怖の拷問だった。

「……！」

次の恐慌が彼の周囲を満たした。接近してくる！ その脅威に全身が震え、痛覚を無視した底力を発揮して、床に手を押し当てて起き上がるうとする。

「くっ……」

しかし半身を起こしたところで力尽きた。そのまま床に頼れる。呼吸を荒げながらどうにか身を返すと、視界に人の足が入った。黒い靴の爪先から舐めるようにそれを仰ぐ。

「……っっ」

声を出さずに口だけを開閉させてそれを見た。

ウイングスだった。冷薄な眼差しで敵を見下ろしている。右手には銀色の銃が握られていた。その先端がカドマスのほうを向いて威圧する。

もはや避けられぬ死という必然が、彼の目の前に訪れていた。
ウイングスは無慈悲な容貌で実の父、カドマスを見下ろしていた。
この世にはびこる悪を裁く審判の容貌だった。その背中にカドマス
は白い翼を見た気がした。束の間……

銃声が鳴った。

長身を屈める天使。ウイングスは膝を折り、床に手を伸ばした。
カドマスの屍体がそこにあった。脳天には生々しい銃痕が燻ってい
た。脇腹からの出血が、血溜まりの池を作っている。ウイングスは
その屍体の開かれた眼に手を当て、撫でるように瞼を閉じた。

Scene10・『挑戦状』（前書き）

今回は『復讐』と同じ夜を別の場所から見た場面になります。ノや
つと更新できて一安心……。これからはなるべくペースを速めて行き
たいと思いますので、最後までお付き合い、よろしくお願いします。

Scene 10 . 『挑戦状』

夜半過ぎ。ガス灯の明かりだけがぼんやりと街頭の闇を照らす。

その僅かな明かりの下で、しくしくと泣いている髪の長い女性らしき姿があつた。ふわりと裾が広がつたエプロンドレス姿で、腕に小さな籠をかけ、頭には頭巾のようなものを被っている。近付いてみると赤く、まるで童話に出てくる赤頭巾のよう。その下で波打つ褐色の髪が顔にかかり、表情を暗くしている。

「お嬢さん、何かお困りかな？」

石畳の上にコツンコツンと渴いた音を響かせながら、そこを通りかかった男性が声をかけた。すると赤頭巾の女性は顔を伏せたまま囁くように言つた。

「……マツチを買ってくださいな」

「マツチ？」

男性は眉を上げ、一瞬困惑の色を見せたがすぐに「いいだろうで、いくらなんだね？」とジャケットの内ポケットに手を入れながら尋ねた。女性は僅かに目だけを動かし、男性の懷に視線を持つていく。

「おいくらなら買つていただけます？」とそこに固定したまま尋ねた。男性は懷から手を出して顎を撫でながら「そうだな……」と思索する。

丸い眼鏡をかけた人の良さそうな老紳士。縦縞のスーツにシルクハット。左手にはステッキ、右手にはアタッシユケース。いかにもつて感じたな。そう内心鼻で笑うのはレッド。赤頭巾に扮装した彼は、顔を上げて老紳士を仰いだ。

「現物を見てから決めるとしよう」

老紳士が言つた。静寂の中にカチツという音が鳴る。自分の顔の前に銃口が向けられたのを薄明かりの中でレッドは捕らえた。

「ではこれを――」

赤頭巾は籠の中に手を入れた。

「おいくらで買ってくださいるかしら」
手を出したのとほぼ同時に

「ミスター・ハット」

カチツと先程と同質の音が鳴る。それを聞いたと時、赤頭巾の手が消える。

「……」

老紳士は静かに息をした。眼前の赤頭巾おんなが向けた銃口と対面して

「どっちが速いか、“試して”みる？」

赤頭巾は笑い

「この糞尼が……っ！」と老紳士が罵る間に――

銃声が鳴った。減音機サイレンサーに絞られた短い音。

「ごめんなさい、おじさま。私、考えるのと動くのがいつも同時なの。もつと遊んでから撃てば良かったわね。あははは……」

レッドは地面に転がった老紳士の死体を見下ろしながら陽気な笑みを浮かべた。

ろくでもない生き方をしてきた奴は、ろくな死に方をしないんだ。

きつと、僕も……

レッドはエプロンのポケットの中から携帯端末を取り出した。それを操作して耳に当てる。

「“ブラザー”、迎えに来て」

間もなくして走って来たワゴン車が彼のいる街道の傍らで停車した。助手席と後部左右のドアが開き、中から暗色の服を着た男達が出てくる。

「！？」

その中の一人が死体を見て血相を変えた。こ、この男は……。込み上げる憎悪を噛み殺すように、拳を固く握り締めて彼は作業に移った。

レッドが死体に向かって顎をしゃくり、“運べ”と指示を出す。

男達はそれに従い、死体を担いで車の後部座席に乗せるとシートベルトを締めて固定した。ハットを目深に被せて表情を隠す。

エンジンがかけれ、車が発進してからレッドは言った。

「ガス、“柘榴酒で乾杯だ”」

それは彼らの言葉で、“仇を討った”という意味だった。

「ありがとう……」

礼を言ったのは先程死体を見て血相を変えた男だった。40代後半の中年男性である。彼には17歳になる娘がいた。彼とは違う一般社会で暮らしている。その娘がある日の夕方、学校から帰宅する途中見知らぬ男に強姦された。そして妊娠させられ、そのショックで身も心もずたずたに引き裂かれてしまった。襲われた時の恐怖と中絶した後に残った喪失感から、精神状態が不安定になってしまった彼女は何種類もの薬を飲み続けた。しかし症状は良くなり、それどころかどんどん強い薬を求めるようになっていった。そして気が付けば薬漬けになっていた。“麻薬”^{ドラッグ}の。彼女は知らないうちにドラッグを飲まされていたのだ。その時の担当医師があの“老紳士”だった。表向きは人当たりのいい精神科医。しかしその実態は患者に違法な薬を投与して薬漬けにし、薬物依存症になった患者に高値でその薬を売り付ける密売人。大人になりきらない若い女性や少女を好み、道端で優しく声をかけては物を買って与えていた。“いたずら”をするその代償に。彼は風体のその特徴から“ミスター・ハット”と呼ばれ、その存在は裏の世界では有名で、それを利用している少女もいた。ミスター・ハットは少女達に金品を与え、少女達はそれをもらうために体を売る。そこに需要と供給の関係が成立していた。それ以外の“いたずら”された少女たちは皆、恥ずかしさ故訴えることもできず、泣き寝入りするしかなかった。そんなこと

も知らずに麻薬を飲まされていた彼女は、改善されない症状と薬の効能に不信感を抱き、そのことを医師に訴えた。すると医師の姿のミスター・ハットはこう言った。

「私はあなたが一番楽になれる最善の方法を選びました。薬だけがあなたを楽にしてくれるのです」

その答えに彼女は最初反論した。それがただの薬でないということとはわかっていいる。しかし薬を飲むと楽になれる。それは疑いようもなかった。

「あなたの痛みはあなたにしかわからない。頼れるのは薬だけなのです」

医師の言葉が彼女に暗示をかける。彼女は次第に反論できなくなつていった。薬にはまっではいけない。でも飲まないと耐えられない。

“医師の言っていることは正しい”。

彼女は悪魔の誘惑に負けた。そして若く輝いていた彼女は今——この世にはもういない。

レッドはそのことを話に聞いていた。彼女と面識はなく何の感情もなかったが、ミスター・ハットを“消す”ことに決めた。仲間の娘の仇を討つ——ということを名分にして。

あいつと同じ空気を吸いたくない。それが真意だった。レッドにとってミスター・ハットは蠅やゴキブリと変わらず、殺してもただの虫を潰したようなものだった。

「ああ、空気がまずい」

レッドは座席のヘッドレストに頭を預け、車内の天井をぼんやり仰いでひとりごちた。目障りな奴を消したのに、なんでだろう。そのままの姿勢で車に揺られながら思考に浸る。そして

まだ“消したい奴”が残ってるからかなあ……

怨恨の炎を宿した目で微笑した。

屋敷に着くとレッドは死体の処理を他の構成員ファミリーに任せ、再び夜の繁華街に繰り出した。歳の近いヒューゴという構成員の少年が運転する車でいつもの酒場みせに向かう。レッドは14歳、ヒューゴは17歳なため、もちろん変装して。そこはカウンターと古臭いゲーム機やビリヤードなどがある店で、レッド達はそこをたまり場にしていた。レッドはまだ未成年だが、今夜は飲みたい気分だった。変装した姿のレッドはその恵まれた容姿を生かした若い女性になっていた。声も喋り方でどうかごまかせるのであればたことはない。彼は堂々とカウンターに座り、適当にカクテルをオーダーした。服装だけ大人っぽくした連れのヒューゴは奥のスペースにいて、ダーツに夢中だった。レッドはカクテルを一口飲み、アルコールが口内に熱く広がるとぼーっと火照った顔を押さえて頬杖を突いた。グラスの中のカラフルな液体を眺めながら、頭をからっぽにして酔いに浸る。

「あちらの方から」

と言ってバーテンダーの男性がテーブルの上に封筒を置いた。レッドが言われた方向に目を向けるとビリヤード台の前に腕を組んでニヤリとしている男性の姿があった。それを見た途端、化粧を施して美しい女性になっていたレッドの顔が引き攣ったように歪む。嫌悪感、不快感、不信任に満ちた拒絶反応だった。内心で悪態をつかずにはいられなくなる。髪型は短めにしたゼブラブロンド・ヘア。服装はダブルで黒のライダースジャケットの下に白のタンクトップ

を合わせ、首には地が紫で白黒の幾何学模様を描いた薄手のストールを巻いている。下は踝が出る丈の細身の黒いパンツにポイントッドトウの白い蛇皮の靴という出で立ちだった。このいかがわしい男性はレッドの従兄弟である。名前はウォルターといい、レッドとは別の組織に属する同業者だ。いつもレッドに悪意のあるちよっかいを出してくるため、レッドは彼を嫌っていた。何から何まで。親戚の一人であることが最大級に許せない。なんなんだよ、この手紙……？ レッドは宛名もない怪しい封筒を不審に思いながら開けた。中から二つ折りにした一枚の紙が出てきた。それを開くと

ボスが殺られた

手書きでそう書かれていた。その紙を手にレッドの動きが停止する。驚愕、悲嘆、怒り——そのどれでもない感情に浸り。

「それを書いたのはオレじゃないぜ」

いつのまにか側まで来ていたウォルターが言った。椅子に座らずに、カウンターに肘を預け、レッドの横顔を見ながら話しかける。

「さつき知らない男に渡されたんだ。というか、無理矢理ポケットに挟込まれた。ああ……そいつならもういないぜ。それにただの使いっぱしりだ。追っても意味がないだろう」

一方的にしゃべった後、そういうことだから、と言い残していなくなる。

「……」

レッドは感情を持たない人形のような表情で、紙を畳んで封筒にしまった。一枚の紙しか入っていない薄い薄っぺらい封筒の閉じた口を指でなぞる。するとコトンとテーブルの上に何かが落ちた。紙しか入っていないはずの封筒から。それは勢いあまって転がり、テーブルの端から落下する。そしてそれが床に向かって落下していく軌道

の中間地点で、伸ばしたレッドの手の中に収まった。彼が握り締め
た手を開くと

38 s p e c i a l。それは弾丸だった。焼け焦げた臭いがする。
付着しているのは血痕か。その側面には文字が刻まれていた。

「ふっ……」

それを見たレッドは笑声が込み上げて、口元に拳を当てた。その
文字は両端が横に反った“W”。翼を広げたようにも見える。

ウイングスか――

意外だな。君がパパを殺すとは思わなかった。

随分と面白いことをしてくれるんだね。

こんな細工までして。

手品までできるんだ？

君のことをもっと知りたくなったよ。

何故、“パパを殺したのかも”。

ウイングス

君はいつたい……

何者なんだ？

そしてレッドは椅子から立ち上がった。

S c e n e 1 0 ・『挑戦状』（後書き）

がんばります！　もう、それしか言えない私…

Scene 11・『誕生』(前書き)

今回は^{フラット・レッド}双子が誕生した日の物語です。

Scene 11・『誕生』

「はあああ——ッ……！」

搾り出すような女の叫び声が室内に木霊した。その傍らには助産婦たちの姿が。

「ほら、もう少し！ いきんで！」

「ああああ……っつ！」

女は目を血走らせ、ベッド脇の握り棒をもぎ取らんばかりの力を込めて握り締める。歯を食いしばり、その声が最後の力を振り絞る甲高い呻き声に変わる。

「んんん……うううッ！」

そこにもう“ふたつ”の叫び声が重なった。

——午前6時43分。白み始めた天に、ほの明るい橙色の曙光が広がり始める刻。ロンドン市内の病院にて、双子の男児が誕生した。

「あれが私たちの赤ん坊かあ……」

「気持ち良さそうに眠ってるわ」

保育器の中に入れられた赤ん坊達の姿を眺めて幸福に浸る若い男女。二人は夫婦で、この赤ん坊達の両親である。赤ん坊達は少し小さめに産まれたため、数日間病院で預かることになったのだ。今のところ何も問題は発見されていなかったが、念のために検査が必要だと医師に告げられていた。

「早く抱っこして、“私がママよ”って教えてあげたい……」

切ない声音を漏らす妻を支えるように、その肩に腕を回す夫。

「大丈夫だよ、ロビネッタ。教えなくても、赤ん坊はすぐに君がママだって分かるさ」

そう励まされた妻は柔らかな笑みを作ってみせるが、瞳には悲し

い色が滲んでいた。双子の赤ん坊は、彼女が腹を痛めて産んだ子供ではなかった。彼女ロビネッタと夫マドックの遺伝子を受け継いだ子には違いなかったが、産んだのは別の女性である。そのことがロビネッタに不安を与えていた。産んでもいないのに、本当に私はあの子達の母親になれたのか？ という複雑な思いが胸に絡み付く。

何も知らない双子の赤ん坊達は安らかに眠っていた。まるで分身であるかのように見分けが付かなかった。寝姿まで一緒だ。同じように片手を上げて眠っている。すると並んで別の保育器の中で眠っているその赤ん坊達の頭が揺れた。

「見た！？ 今、同時に頭を動かしたの！」

「ああ、見たよ。双子って面白いな」

そしてまた止まって睡眠に入る赤ん坊達は、まだ泣くことと眠ることしかしない無垢な天使だった。

6日後――

早朝の新生児室。保育器の前に立つ一人のナース。装置の中には茶色い髪の未熟児が眠っていた。隣の装置の中にはまるつきり同じ姿の未熟児が。ナースはその一つの蓋を開けた。中から赤ん坊を取り出すと毛布で包み、脇にあった台車に乗せる。それを通路に運び出した。と、すぐそこを野球帽を目深に被った男がシルバーカーを押して通り掛かり、流れるような手つきで毛布に包まれた赤ん坊を台の上から奪って、シルバーカーに入れた。男はそのまま通路の奥へと消えた。

静寂に包まれた病院の個室にバイブ音が響いた。ベッドで寝ていた女が目を覚まし、唸っている物——携帯電話を枕元から取り出す。女はすぐにベッドから降りて着替えを始めた。パジャマを脱いで踝まで丈のあるワンピースを頭から被って腕を通し、ストールを肩にかけ、さらに白髪混じりの髪を被り、紫色のグラデーションがかかったレンズの眼鏡をかける。顔体ともにまだ若さを残した女の姿が見る見るうちに歳老いた老婆の姿へと変身した。女は携帯電話を片手に、ベッドの縁に腰を下ろす。

06:00——携帯電話のディスプレイがその時刻を示した直後、病室のドアが開いた。野球帽を目深に被った男がシルバーカーを押して部屋に入ってくる。

「……」

それを部屋に置くと男は無言で部屋から出ていった。

“老婆”が動く。男が置いていったシルバーカーに荷物を乗せるとそれを押して病室を後にした。

老婆がシルバーカーを押して院内の出口に行くと、先程の男が先に来ていた。その男が針金のようなものを使って鍵を開け、同行して屋外に出ると、既に敷地内に乗りつけた車が待機していた。二人はそれに乗って逃走した。

数分程走ったところで車は停車した。人通りの少ない路地だった。道端に目印のようにブラックメタリックのアルファ・ロメオ159が停まっている。側に煙草を吸いながら立っている男がいた。その奥の路地裏に入ると柄の悪い数人の男たちが待ち構えていた。その中央に縦縞のスーツを着たボスと思しき男が立っている。

「確認しろ」

その男が指示を出す仲間の一人在動き、老婆が運んできたシルバーカーの中を調べた。赤ん坊を発見すると蓋を広げてボスにもそれを確認させる。

「よし」

ボスは満足げに頷くと邪悪な光を忍ばせた眼で老婆おんなを見ながら、前に進み出た。

「よくやった」

ボスがそう労いの言葉を述べると老婆——女の口元がゆっくりと吊り上がった。

ボスが顎をしゃくると仲間が素早く動き、女が運んできたシルバーカーを持ち去っていった。女は目の端にその光景を置き、興味を前方にいるボス——男に向けた。髪を脱ぎ、眼鏡を外す。

ボスが歩を進め、二人の距離が近付く。

女は手を伸ばし、その手がボスの首に回される。

「何故……？」

女を受け止めた男の手は紅い液体で濡れていた。粘土を帯びたその液体がボタ、ボタと滴り落ち、地面に紅い雨を降らす。女は力尽きてボスの体をずり落ち、コンクリートの固い地面にその身体を打ち付けた。男はそれをちらりとだけ見ると

「始末しておけ」

残っていた仲間にそれだけ伝えて路地裏から出ていった。すぐに表のほうから車のエンジンがかかる音が響く。表に停めてあった愛車のアルファロメオ159に乗って男が走り去っていく音だった。

「力……ドマス……」

女は搾り出すような声で男の名を呼んで事切れた。

Scene 11・『誕生』（後書き）

次回も過去のエピソードになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6298f/>

血族『Last stage』

2012年1月12日20時55分発行